

男女が争う南米の某国に取材に行った男が  
女ゲリラ村で出会う金責め逆レイプ、そして金リンチ！  
『女ゲリラ対男一人』  
玉だけ狙ってくる女に男は勝ち目なし？



玉子王子 著

## 1章 必修、護身術。教室に男は俺一人。寄ってたかって金狙い撃ち

——護身術なんていらなないけどな……

思いつつ、スパッツに裾の長いシャツ姿の男。

柘植優吾。三〇歳フリージャーナリスト。

幼いころ、天才ジャーナリストが実はデマを報道していたことがばれてクビになる内容の映画を見てジャーナリストにあこがれ、メディア関係に就職しようとした。

業界の不正を暴く正しいジャーナリストになりたかった。

しかし三流大学出では難しく、それでも夢は諦められず、名乗ったもん勝ちのフリージャーナリストとなった。

そして鳴かず飛ばず、しょぼい芸能人のスキャンダル写真を売って金を貯め、比較的危ない場所に取材に行って名を上げようとする、あまり「一流ジャーナリスト」になれる感じではない人生をおくっていた。

そんな柘植が周りを見る。

どうも、女ばかり。

南米、ビトラ共和国。

探検家だか商人だかの白人と彼らが連れてきた人たち、そして現地の人たちの混血の人々が暮らすよくある感じの国。

大体、白人の割合が多い国だ。

やや肌の色が濃い感じの白人女性たちに囲まれている。

浮いた感じだが、それは人種のせいではない。

スペイン語を話す国で、柘植は当然のようにそれは話せないが、ナノテクノロジーが発達したこの世界では飲んだだけで一月ほどは特定の言語が使えるようになるものすごく都合がいい薬がある。

今そのスペイン語の奴を飲んでいるので、会話に問題はない。

言葉が通じれば、人種が違うとって浮いたりはない。

浮いている理由は、もっと根本的なものだった。

「男の人がこんなところに？」

「大丈夫かしら？」

「まあジャーナリストらしいから……」

「すぐに捕まってアレ……ってことはないでしょうけど」

クスクス笑いながら、柘植を見てくる。視線はかなり下のほうを見ていた。

——なんだ？ 捕まるって……ジャーナリストが？

レスリングの教室のような部屋。

ビトラ共和国の封鎖された開拓地帯の出入管理所の一つ。

と、教室にスラっとした女性が入ってくる。その割に、胸は大きいといううれしいメリハリのある若い女。

「皆さんこんにちわ。あら？ 男性もいるんですね。大丈夫かしら……」

チラ、とまた下……というか、股間のあたりを見てくる。

「あ、あの、先生……俺はジャーナリストだから別に」

「そうなんですか。じゃあ大丈夫かしら」

「大丈夫って、そもそも何が心配なんですか？」

「あら、やだ……そんなこと聞く？」

先生が入ってきたので、いったん収まっていたクスクス笑いがまた再開される。

そちらを見て、ニコリと笑う先生。護身術の先生である。

正直、柘植より年下だ。

女たちも大体、二〇から二五ぐらいで、みな年下。

まあ、年下だからどうということもないが。

「えーっと、柘植さん、だったわね。日本の方。この開拓区の事はどのぐらいご存じで？」

「たしか……何か政治的な理由で無人だったのが、一年ぐらい前から開拓に若い男女が送り込まれて……大体これが二十万人ぐらいで……でも男女で争いが起きて、今男と女でゲリラ戦やってるとか」

「そう。こんな離れた国の事でも報道されてるんですね」

「そりゃもちろん」

——若い男と女が分かれてゲリラ戦やってるなんて、注目されるもんな。そういう形だと、当然エロ方面の噂も立つ。**捕まった女ゲリラが犯されまくる**とか……しかし大手のメディアじゃそういうの「怒ってる」という顔して、実際のところは好奇心で踏み込むってのは難しいからな。

そこで、使い捨て上等のフリージャーナリストの出番になる。

いいレポートでも書いていけば、それは買ってもらえるのは当然として、さらに追加取材も頼まれるかもしれない。

そこから、継続的な仕事を得られるかもしれない。

——ただ、ゲリラ戦だからな、戦争だからな。いくらどんな怪我でも治るナノ薬があるとはいっても……捕虜にして、薬が切れたところをやられたら簡単に死ぬ。だから、余計大手は来られないし、ほかのフリージャーナリストも踏み込まない。賭けだ。でも、悪くない賭けのはずだ。白人系のこの人たちから見れば俺は明らかに異人種だから、敵と間違われるとは考えにくいし。

「大体、今どのぐらいの人がいるんでしょうね」

「発表によると、女十万人で、男は一万人ぐらいですよ」

唾をのむ柘植。

——ウソだろ。男弱すぎる。っていうか……殺され過ぎだ。九万人も……

「あ、誤解させちゃいましたね？ ここでの戦争では、誰も死んでないんですよ。男の人たちは、ヤバいからって逃げちゃって、残り一万人って話で」

「え？ 逃げる？」

「あら？ うふ、全然知らないんですね？ ここでの「戦争」の実態を」

女たちを見る先生。

「なんだ、知らないんだ。だから来れるんですね」

「男の人なのに、すごい勇気だなって思ったんですよ」

「さっすがサムライの国ですわ」

「もしくはヘンタイの……」

「男の人はここでは大変ですよー？」

ちょっと興奮した、赤らんだ顔で言ってくる女たち。

のけぞる柘植。

——なんだ？ 男男って……なんでそう男を強調する？

「ここでの争いは、どうやって始まったのかよくわからないんです。男軍女軍両方とも相手のせいだって言ってますし。ともかく争いが始まって、はじめは男の人のほうが力も強いですし、有利に戦ってたんですけど……」

「でも、女軍が気づいちちゃったんですよね……」

「そうそう。というか、前から知ってはいたんですけど」

女たちの目が、一点に集中する。

柘植の股間に。

「え、まさか……」

「鉄砲で撃たれても、ナノテクですぐ再生しますよね。男の人の体のほうが頑丈だから同じ撃たれても平気……ってことはないですけど、ともかく女軍は押されてたんですけど……ある時ですね、女軍の指揮官の一人の友人が捕虜になって、その、ひどい目にあわされるという事件があつて」

「それまでもそういうのが山ほどあったのよ」

「男ってどうしようもないわね」

「で、そのあと、その指揮官が男軍の捕虜に仕返しするんだけど……何をしたと思う？」

思わず膝を締める柘植。

——仲間をレイプした男への報復。それも女だけの集団が……となればもう……

手を叩く女たち。

目を見開き、食らいつくように口をあけて笑う。

「そうそう！ それです！ 男の……」

「やっぱり男の人だから……どこが狙われるのか、って聞かれたらどこの国でも考えることは同じなのね」

「だって「付いてる」んだもん、ね？」

「ナノテクでどんな怪我でも治るから、女軍の指揮官は捕まえた男兵たちに、やったことにふさわしい罰を与えることにしたんです。それはもちろん、タマタマへの責め」

「そこよ、そこへの攻撃！」

「柘植さん、やられたことある？」

「そ、それはまあ……」

——あるに決まってる。特に玉無しの女どもにとってここは一方的に狙えるおいしい標的だからな……ガキの頃に同級生の女子に蹴られ、高校ではギャルっぽいのにゴリゴリ揉み解され……大学の時に痴漢と間違われてOLに膝蹴り食らったこともあったな……

思い出せば出すほど縮みあがる。

「やだ、ビビってる！」

「大事なところだもんね！」

ぎゃははは、と笑いまくる女たち。

一人、わりと冷静な先生が嘔き出すのをこらえつつ話を進める。

「女兵たちが男兵の大事なところを寄ってたかって蹴り潰し、踏み潰し、木に吊るして足を開かせてパンチやビンタで叩きまくってもう、一人一〇〇回以上は去勢したんですよ」



「もちろん、終わったら治して解放するんですよ？」

「治るからこそやれることよねえ。さすがに玉無しはかわいそうだし」

「直接の犯人が捕まった時はすごかったらしいよね」

「一〇〇人の部隊で、一人二〇回ずつ去勢だって？」

### 「キャン玉、四〇〇〇個潰し」

「ま、レイプの報いよね」

「それから、お互い捕虜を積極的に取り、レイプと玉潰しのやりあいになりまして……戦いでも、接近戦でタマタマ潰しを積極的に狙って……」

——それは対等な「やりあい」なのか！？ 玉潰しのダメージデカすぎね！？ いくらすぐ治るにしても……

ナノテクの薬を飲めば一〇秒で玉ぐらい再生する。

もしくは、一日の間無限再生する薬もある。戦場ではそれを飲んでいるだろう、銃で撃たれようが爆弾でばばらに吹っ飛ばうが多少時間がかかっても再生できる。事実上不死身といえる。

もちろんその薬を飲んでいけば玉など潰れた端から再生だ。

「ったく、ひどいよね男って」

「タ○キンが潰れても治るけどさあ……無理やりやられた心の傷は治らないよ？」

「玉潰し！ レイパーの男兵どもはキ○タマ潰ししかない！」

「もう磨り潰し！ 磨り潰しが当然、レイプ好きの男兵のキ○タマは！」

——男兵のほうも、「玉潰し女兵はレイプで当然」と思ってんだらうな。

「ん、柘植さん何か言いたいことでも？」

「そりゃブラブラタマタマぶら下げてる柘植さんは私たちとは考えが違うかもねー」

「いや、そんなことないですよ。レイプはまずいでしょ、やっぱり」

「そうよね！」

「よかったわ！ **レイプ否定派、去勢肯定派**で」

——なんだよその派閥は！？ 俺はどっちも否定派だ！ でも、ここでこんな馬鹿どもに本当のことを言っても仕方ない……どうせマスコミにあっさり騙されるアホどもだ。こういう連中を**正しい報道（笑）**で**導く（笑）**ため、今日を耐え忍ぶ！

というわけで、中途半端な愛想笑いを浮かべる柘植。

「まあそんなわけで、この開拓地の主導権争いは、ほぼ女軍の勝利に終わりそうってことです」

「はあ……ていうか主導権争い？」

「そう。もともとそういう話はなかったんですが……どうせだから勝ったほうがこの土地を支配するということで……州知事をはじめとして、幹部は全部女という、女の理想郷になる予定で」

——女だから女の味方とは限らないだろうが。っていうか男軍頑張れ。逆転勝ちしろ。

「男軍が少ないのは、玉潰しされて、恐れをなして逃げ出したってことですか？」

「そうなんです。うふふ、男の人ってタマタマ狙われるとほんと弱いんですねえ」

「そんなに痛いのか？ 柘植さん」

「いや、もちろん死ぬほど……」

「痛いらしいですよ。だからこそ護身術じゃ狙っていくわけで」

「あ、そうだったわ。今日はそれ習いに来たんだった」

——そうだ、開拓地は危ないから必修なんだよな……めんどくせえ……銃で撃ってこられたら同じじゃん。

「それじゃ始めましょうか。あ、それと……実は捕虜になったらやられるのはタマタマ潰しだけじゃないんですよ」

「まだあるんですか？」

「測定です」

唾をのむ柘植。

もちろん、周りの女たちはニヤニヤしながら、その股間を見てくる。

「何の測定でしょうね？ 柘植さんわかります？」

「その……」

「きゃはは、男の一番の秘密！」

「金弛緩剤でゆるゆるにして、本当の数字を測っちゃうの！」

「十万人いた男たちの八割は測っちゃったのよね」

キュウ、と柘植の股間が縮む。

——測定だと……玉潰しの上に測定。もう絶対、あれに決まってる。チ○ポに決まってる。ひでえ、玉潰しなら治るけど、治っても絶対嫌だけど……でも治るけど、チン長測られたら、その心の傷は癒えないぞ。ひでえよ……逃げるわけだ。男兵が……



女たちが周りに群がる。

「ねえ、何の長さだと思う？」

「なんだと思う？ ねえ？ うふふ、背丈かな？」

「なんだろう？ 柘植さんどう思う？」

肩に触れ、太ももをなで、顔に顔を近づけてくる。

赤面すると、また女たちは楽しそうな顔を見せる。

「あ、わかっちゃったみたいね」

「正解は……チンチ○の長さ！」

「部隊ごとに情報を共有して……初めから取ってたわけじゃないし、重複もあつたらしいけど、それ

でも大体八万人分のデータを集計してるのよね」

「で、平均が出たんだけど……知りたい？」

「いや……」

——チ○コの長さなんて聞きたくねえ。外人だからデカいのか？ まあ俺のは相当デカいほうだから、ますますどうでもいい……いや、そんな問題じゃなくて、測られた奴の心を思えば……

「萎えて五センチで、立って十cmが平均値だって！」

「自己申告の平均とだいぶ違うって話題になってねえ。えらく見栄張ってるわねって」

——日本人が一四から一二って話があるよな？ それもデカく申告してるとしたら、ここの人たちと同じくらい？ 外人だからデカいってのはウソってことか？ いやまてよ、女軍が嘘ついてるのかも？ っていうか日本の平均が見栄張ってるとも限らないし……

「嘘の情報だ、って男軍が声明出すんだけど、顔と物差し当てたチ○コの写真のデータ出してもいって女軍が言ったら何も言わなくなってんの！」

「ぎゃははははは！」

「ゲラゲラゲラ！」

もう柘植の股間を女たちがガン見していた。シャツで隠れているが、シャツもスパッツもパンツも全部透視して見られている気がする。

——ああ、嫌だ。男は嫌だ。女なら乳の大きさは見ればわかるし、カップがわかってもどうってことはないが……チ○コはもう知られたら救いがない。

柘植は実のところ三十センチを少し超える巨棒の持ち主である。

しかしそれでも「三Xセンチ」と公表された時の屈辱感は想像するに余りある。

まして平均が一〇では一桁のものも多いことだろう。

——俺のが一桁で、それを公開されたらと思うと……やってらんねえ。仕返しにマ○コ写真公開しても釣り合わねえよ……外人だって同じ男だ……さぞ無念だっただろう……男軍の逆転勝利を祈るしかないな。俺の記事読んだト○ンプ大統領が軍隊送ってくれりゃいいんだが……

「タマタマ潰しとおチンチ○の測定で、もう男兵の心はボロボロ。二、三回ほど捕虜になれば逃げちゃうのよね」

「それで一万人ってわけ」

「一〇対一じゃ、もうおしまいよね」

「女軍の大勝利。残りの連中も数で押してタ○キン潰して……」

「あ、でも残ってる連中は結構、すでにタ○キン潰されたことがある奴が多いみたいだから……」

「やだ、ドM？ むしろ潰されに残ってる？」

「かもね。知らへんけど」

「残った奴の中で、まだ潰されてない測定されてない、ってやつはどのくらいなんだろう？」

「初期は玉潰しだけだったわけだからねえ、そのころにやられて、今まで逃げ切った奴が残ったやつ半分の半分なら、プラス五〇〇〇人かな？」

「後五〇〇〇本かあ。測られる前の初期玉潰しの時点で逃げた奴多すぎね」

「タマタマ狙われたら、男てほんとびびっちゃうのねえ」

ぎゃはは、とまた楽しそうな女たち。

「それじゃ、皆さん護身術の授業を始めますよ。いいですか柘植さん」

「あ、はい」

——っていかとととやれよ腐れマ○コが。

男軍が受けた仕打ちを聞いて、女全般への憎しみが沸きつつある柘植だった。

と、教師がぶかぶかしたシャツを脱ぐ。

ぴったりしたシャツと体に引っつくスパッツで、体の線がはっきりと浮き出す。腹筋も見える、絞られたいい体で、しかし女としての肉付きも十分以上。

周りの女たちも同じ格好になる。

鍛えている先生と違って、多少腹に肉がついている者もいるが、みな体の線がはっきり出ても見苦しいところはない。

思わずため息が出そうになる柘植。

——くそ、やっぱり女の体のほうが綺麗だよな。男じゃ体の線をだしたら、いくら鍛えてても一部だけボコッと見るからに余分に何かついてます、ってのがわかって……特に俺なんかデカイから目立つんだ。

シャツを着たままの柘植に、先生が肩をすくめる。

「ダメですよ柘植さん。シャツ脱がないと」

「いや、このままで別に……」

「あら、スパッツが膨らんでるのが恥ずかしいのかしら？」

「男の人ならそれが普通よ」

「私たちの事なら気にしないで」

「そうそう、みんな既婚者でしょ？」

「慣れてるから大丈夫」

——大丈夫って見られるのは俺なんだぞ？ スパッツじゃ形が。

「そんな恰好じゃ危ないですから。中に入るにはこの護身術の教室は必修なんですよ」

——困ったような顔してるけど、頬は緩んでるぞ。なんなんだよ……

舌打ちしたいが、仕方なくシャツを脱ぐ。

おお、と女たちが声を上げる。

男に慣れた女たちだが、それが初めてモノを見たように顔を赤らめ、チラチラと顔を見合わせる。

「ちょ……ごっついわねえ」

「うわ、「男」って思いきり主張してるわ」

「がつつり頭の位置もわかるし……」

「お、大きいですね」

「女軍の発表じゃ一番大きい人で二六センチだったらしいけど……これってもう、この時点で超えてない？」

羨えて三二センチという大げさすぎる逸物である。

褒められてもどう反応していいかわからない。顔を赤らめて目をそらす。

「マジでえげつないわ」

「ご、ご立派で……」

「ちょ、横から見て、明らかに異様よ。麻薬でも隠してるみたい、五〇キロぐらい」

「ある意味麻薬かもね」

「あらやだ」

「だって、今までの私の経験じゃ大きいほうがよかったし……ならあれは」

「いや、アレはデカすぎでしょ」

「これがウタマロってやつね……」

「浮世絵で見たのと同じよ。こういう人本当にいるんだ、うーん、デカいわ。ほかに言いようがないわ」

ぼそぼそと話し合う女たち。

——さっきまでの前のめりとは違うけど……やっぱ好き勝手言ってることに変わりねえよなあ……でも今度の話は、我慢しないと立ちまう……これはこれで迷惑だよな……

と、先生が手を叩く。

「はい、それじゃ練習始めますよ。柘植さん、相手がいるほうがわかりやすいんで、お願いできますか？」

「あ、はい」

「うわ、歩くとゆさゆさ」

「オッパイか！」

「邪魔そう……」

「邪魔は悪いわよ！ でもまあ邪魔よねえ」

噴き出す女たち。

——歩くだけで笑われるんかい！

先生に相對しながらチラ、と横を見てしまう柘植。

その前で、ひゅつと軽く、爪先を跳ね上げる先生。

グニュ、とその揺れていた肉塊に先生の爪先がめり込む。

「え」

ゆっくり、正面を見る柘植。

先生の足が、自分の絶対急所を持ち上げていた。

——う、嘘だ。そんないきなり……でもあ、痛みがじわじわ……

「おぐうううっ！」

棒立ちの柘植。ぴったりしたシャツとスパッツがじっとりと汗に濡れる。

「あ」

「ぷっ、やだっ」

「あはっ、金的蹴り決まりました！ 大事なものに直撃です！」

「いやん、いきなりねえ！ **開始即女体化**って急ぎすぎよねえ」

「でもまあ護身術なら当然よねえ」

「はい、皆さん見てましたね？ 今のが護身術の基本です。男の人の大事な、タマタマを蹴る。いわゆる金的蹴りですね。ゴールデンキック」

「うわ、あの顔見て！ 本当に痛そう」

「柘植さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫、軽く当てただけですから。ね、柘植さん？」

「あぐ……おおおっ！」

やっと反応する柘植。股間を抑え、腰を引く。

——ごああああっ！ 口で言えばわかるだろ！？ せめて寸止めにしろ……マジで蹴り込むとか、確かに強く蹴ってなかったけど、ここやられたら十分致命傷だ！

「ああああああああああああっ！ たまああああ！」

紙を丸めるように顔を歪ませる柘植。

その悲惨な姿に、さすがに青ざめて心配する……というようなことは全くない女たち。

「ぎゃははは！ 痛そう！」

「うわあ、効いてるわ。タマタマキック効いてるわ」

「うーん、金的ってマジで効果的ねえ」

「立派なチンチ〇でもタマタマを守る盾にはならないのね」

「ますます邪魔なだけねえ、あのデカチンチ〇は」

「うちの国の男どもはその点進化してんのかも、粗チンに」

「まあ二六センチの大物さんもいるわけだけど」

「っていうかこら、一〇センチを粗チンとかいうな」

「まあ、目の前の柘植さんのウタマロチ〇ポと比べたらねえ……」

「これと比べちゃ可哀そうよ」

「あは、確かにね」

笑う女たち。

一人、深く息をする柘植。

「ぐぬううううう」

——どう考えても可哀そうなのは俺だろうがよ！？ キ〇タマ蹴られてんだぞ！？ お前らも一回蹴られてみる！ って、玉なんて上等なものはないから無理ってか！ くそ、マ〇コどもが！

意味もなく、女たちの股間を見てしまう。

——ああ、すらっとした、車や船、飛行機のシルエットを思わせる股間……同じ隠す場所でも、男と違ってパッと見比べられもしないし、弱点でもない……絶対こっちのほうが有利だ……畜生、なんで男だけこんなに不利なんだよ……

と、前に立っていた先生が自分の股間を撫でる。

「柘植さん、急所がない女の股間を見てどうしたんですか？」

「あ、いや……」

「うふふ、普段ならエロ目線でセクハラ扱いですが……セクハラで金ちゃん蹴りですが……今はうらやましがってるのがわかりますから、セクハラとは言いませんよ」

青ざめていた柘植の顔が真っ赤になる。

「べ、別にうらやましくなんか……」

「そうですか？ 金ちゃんを蹴ると、男の人は大体「ずるい」「うらやましい」って感じの目を、私のここに向けるんですけどね」

クスクスと笑いつつ、先生。

——ああ、優越感感じるわ。こんな体格もいいし、おチンチ〇が大きいのを自慢に思ってそんなマッチョな「男性様」を軽い一蹴りで身動きできなくして、同じ反撃は絶対受けない場所から見下せ

るなんて。別にこうやって実践する必要なんか無いけど、うまいことを言って蹴ってよかった。ほかのお客さんも受けてるし。別に受けたからって何ってこともないんだけどね。

「それじゃ、そろそろ」

「そ、そろそろって」

柘植の後ろに回る先生。

片手で首を絞める、というか半ば抱き着くような感じだ。巨乳が背中にぶにゅうううん、と押し付けられて変形する。

「あっ……おふっ！」

「武器を持った相手に捕まったとき、相手が不用意に前を歩けばこうやって首を絞めつつ……」

「やだああ！ タマタマ握り！」

「そう。男子の急所を握り潰すんです」



「ちょ、強い！ 強く握りすぎ……おぐっ」

ゴリゴリ、と先生の細く柔らかい指が大型の草食動物並の柘植の睾丸にめり込む。根元を親指で押して玉を指の中に追い込み、握り潰しに行く手慣れた玉握り。

「きゃあ、見てみて、柘植さんおキャン玉も大きいわ！」

「うわっ！ うちの種豚ぐらいある！」



「そうよね、男の子の大事な金の玉。二個あれば片方潰れてもいいけど、一個じゃもう駄目よね。潰れたらおしまい。男終了。大事な残り一個の男性生殖器。シンボルだけ残っても玉無しじゃ仕方ないもんね。片金潰れたなら怪我だけど、両玉だと去勢で意味が違うもんね」

「やめ……ぬおおおお！ やめ、潰れる……一個だけは残して……あっやめ……」

「うふふ、男でも自分の玉がどのぐらいで潰れるかなんてわからないよね。必死で抵抗して逃げないとね」

「先生、柘植さん全然力出ないんですけど」

「あら、じゃあタマタマはもういらないんだ？」

「か、片金潰されて力なんか……か、がああああああああ！」

「きゃあ！ 残りの玉も潰れちゃった！」

「やだ、玉無し？ 玉無しなんだ？」

「こんなでっかいおチンチ〇してタマタマはないなんて……」

「ぷっ、玉無しって……うちの家畜と同じじゃん」

「そうなの？」

「種豚以外タマタマ取るのよ」

「ぎゃははは、悲惨ねー。もちろん再生無しでしょ？」

「もちろんよ。人間はタマタマ潰れても治してもらえていいよね」

「まあ一番いいのは、タマタマみたいな急所をぶら下げてない女の子に生まれることなんだけど」

「違くないわ。家畜でもなんでも女の子なら玉抜きなんてされないし」

「男って弱いねえ、タマタマ守れないとおしまいじゃん」

ゲラゲラ笑いつつ、女たちは泡を吹く柘植をしばらく見下ろしていた。

体験版終わり、続きは製品版でお楽しみください。

この後柘植は女ゲリラたちの中に入り込み、これでもかと金的責めを食らいます

逆レイプというご褒美(?)もあるにはありますが、  
玉潰しの密度が濃すぎてとてもよろこんではられません。